

復元製作実施設計書

[復元資料名] 粟鶉図 ^{あわうずらず}	
[原資料名] 粟鶉図	[指定] ※原資料写真は重要文化財
[年代] 18 世紀	[作者] 殷元良（座間味庸昌）
[所蔵] 原資料消失。 原資料写真は沖縄県立芸術大学附属 図書・芸術資料館が所蔵	[所蔵番号]
<p>[選定理由]</p> <p>近世琉球を代表する絵師・殷元良（座間味庸昌）が描いた粟鶉図である。原資料は沖縄戦で消失したが、大正期に鎌倉芳太郎が撮影した写真が残っている。鎌倉によると、殷元良は花鳥画の中でも粟鶉図を画題として好み、本作をその代表作例としている。中国絵画や大和絵との関わりも考えられることから、殷元良の作風変遷を辿る上でも重要な作品である。現存する類例を分析することで往時の姿を取り戻すことができ、また、18 世紀琉球における彩色や線描等の技法を明らかにすることができると考えられるため復元対象とする。</p>	
<p>[保存状態]</p> <p>原資料は消失。大正期に鎌倉芳太郎によって撮影された写真がある。近年、高精細で再現像される。</p>	
<p>[法量]</p> <p>縦：89.8 cm ×横：43.7 cm（本紙） ※鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』p. 189 参照（岩波書店、1982 年）</p>	
<p>[素材・材質]</p> <p>基底材：絹と思われる。 色材：白黒写真の為詳細不明。類例調査により検討する。 表具：乾隆の緞子、金襴の良い裂地を用いる。</p>	
[技法] 絹本着色	[付属] なし
<p>[想定される科学調査]</p> <p>蛍光 X 線分析（類似事例を令和 6 年 1 月 22 日調査済）</p>	
<p>[主たる材料調達先]</p> <p>規定材：国産または中国産の画絹の購入を想定。 色 材：国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料、または有毒性のある材料等については代替材の使用も検討する。 表具裂：国内で入手可能な裂を用いる。必要に応じて裂も製作する。</p>	

[年度別工程表]

年度	製作作業内容
2024（令和6）年	①熟覧調査
	②画材調達
	③表彩色・裏彩色の検討
2025（令和7）年	①絹の張り込み道具製作
	②彩色のテスト見本作成
	③ドーサ引き
	④上げ写し
	⑤絹上げ
	⑥表具裂の検討
2026（令和8）年	①彩色の試作
	②裏彩色
	③表彩色
	④表具裂の確保
	⑤表具の見本作り
2027（令和9）年	①表装
	②報告書作成

[製作仕様]

基底材：琉球の絵画に比較的使用されている絵絹とする。布の密度は監修者、製作者、事務局で相談の上決定する。

図 像：古写真を原寸大に拡大し下図を作ること。

色 材：類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定する。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料、または有毒性のある材料等については代替材の使用も検討する。

試 作：彩色のテスト見本を作成すること。監修者または製作者の必要に応じ部分試作等も行なうこと。

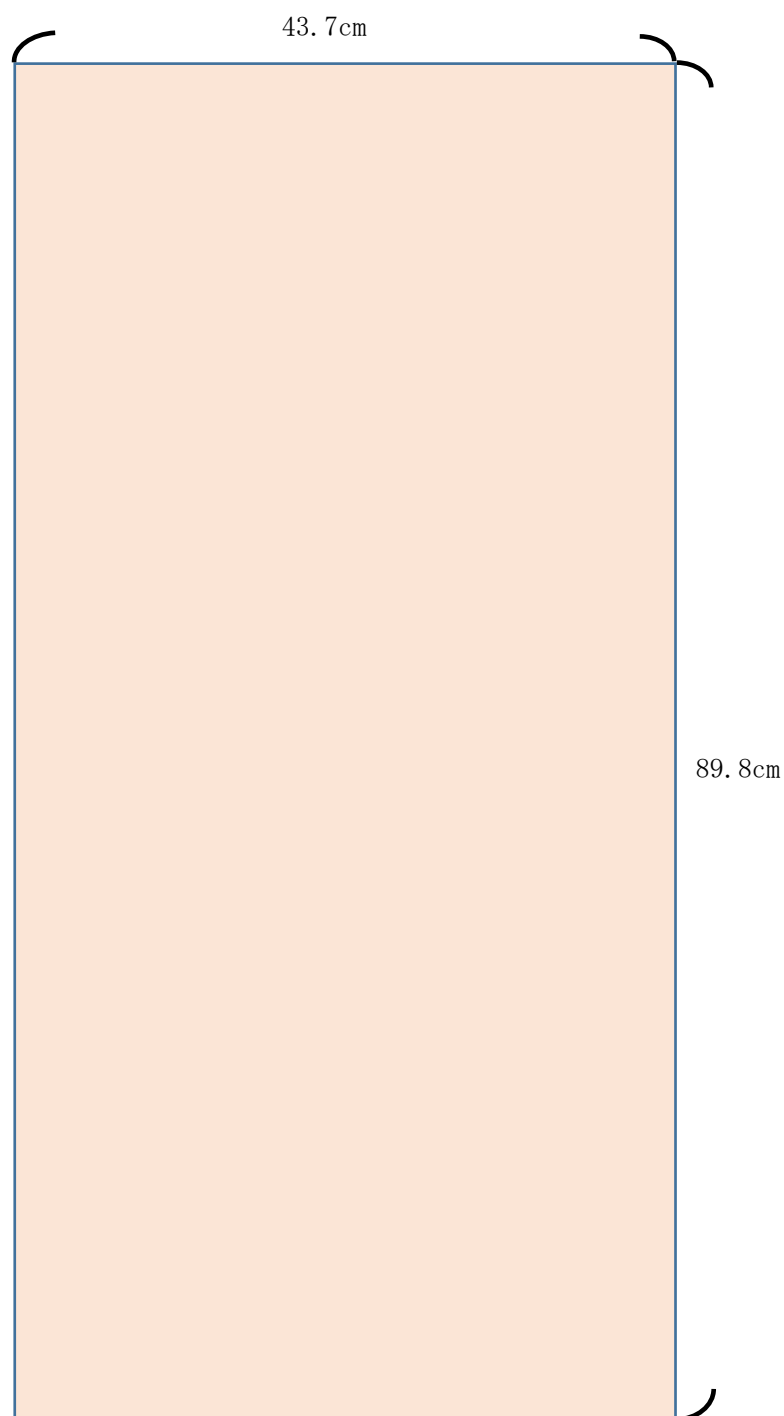
彩 色：彩色のための絹の張り込み道具を作成すること。また、製作にあたってはドーサ引きを行い、必要に応じて裏彩色を行うこと。

仕上げ：掛軸装とするが、表具裂については原資料の情報を参考に監修者、製作者、事務局で協議の上決定する。また、「模造復元 栗鶉図」等の情報を題箋に記して貼り付けること。

納品：本製作及び試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真などを納品すること。本製作については、太巻を付け、保管用の絹布を準備し、保存用の木箱を作成すること。必要に応じて紙帙も作成すること。

その他：歴史上の誤謬を避けるため箱に模造復元の製作年、製作者、事業名を記すこと。

【製作図】（本紙のみ）



[備考]

・鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）pp. 224-225

写真 337・338 首里市 豊見城朝熙家蔵

「殷元良の花鳥といえは栗鶉といわれるほどその最も好んで画いた題材である。そして、首里尚侯爵家、那覇宮里オミト家にもこの図の掛物を伝えていたが、本図は特にその表紙に乾隆の緞子、金襴の良い裂地を用いてあり、絵が出来た当初から名作として大切にされたらしく、それほど絵画として優秀であり、その代表作としてここに掲載する。思うにこの絵の製作年代は、殷元良の三十歳代と推定される。その理由は、少年期より学んでいた呉師虔の画風、すなわち孫億伝の南中国閩派の風から脱却し、その間に福州から舶載の中国古画、それは摸写本であったかも知れないが、ともかくもそれによって宋元の花鳥画を学ぶ機会があったと思われ、そのため先師に優る調子の高い絵を画くに至った年代と思考する。ここに画かれている雌雄二羽の鶉の描写には、宋代の李安忠等院体の画風を学んだかと思われるところがあり、その描法も勾勒設色のいわゆる黄氏体の流に属するもので、画面全体の構図法から見ても元代中国絵画の格調をもっている。従ってこれは辺境の絵画ではなく、海上王国琉球の画人殷元良の天稟をもってして、東洋絵画の真髄を把握したものであるといっても過賞ではあるまい。」（鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』 pp. 189-190、岩波書店、1982年）

[資料名] 栗鶉図



337 栗鶉図 殷元良筆
鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、
1982年) 224頁より

[復元資料名] 桐牡丹鳳凰図 <small>きりぼたんほうおうず</small>	
[原資料名] 桐牡丹鳳凰図	[指定] ※原資料写真は重要文化財
[年代] 18世紀	[作者] 向元瑚（小橋川朝安）
[所蔵] 原資料消失。 原資料写真は沖縄県立芸術大学付 属図書・芸術資料館が所蔵	[所蔵番号]
<p>[選定理由]</p> <p>近世琉球の絵師・向元瑚（小橋川朝安）が描いた桐牡丹鳳凰図である。原資料は沖縄戦で消失したが、大正期に鎌倉芳太郎が撮影した写真が残っている。鎌倉によると、原図は福州から船載された明画と思われ、克明に摸写しているとしている。向元瑚は代表的な絵師でありながら作品が現存していないため、写真をもとに類例から復元することで、琉球絵画史の研究に資することができる。また、18世紀琉球における絹本への彩色や線描等の技法、中国絵画とのつながりを明らかにすることができると考えられるため復元対象とする。</p>	
<p>[保存状態]</p> <p>原資料は消失。大正期に鎌倉芳太郎によって撮影された写真がある。近年、高精細で再現像される。</p>	
<p>[法量]</p> <p>縦：103.7 cm 横：45.8 cm（本紙）</p> <p>※鎌倉芳太郎 『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）参照。</p>	
<p>[素材・材質]</p> <p>基底材：絹布</p> <p>色 材：（類例調査より選定）</p> <p>表具裂：不明</p>	
[技法]	[付属]
絹本着色	なし
<p>[想定される科学調査]</p> <p>蛍光X線分析（R6年度に類似事例調査を計画）</p>	
<p>[主たる材料調達先]</p> <p>規定材：国産または中国産の画絹の購入を想定。</p> <p>色 材：国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料、または有毒性のある材料については代替材の使用も検討する。</p> <p>表具裂：国内で入手可能な裂を用いる。必要に応じて裂も製作する。</p>	

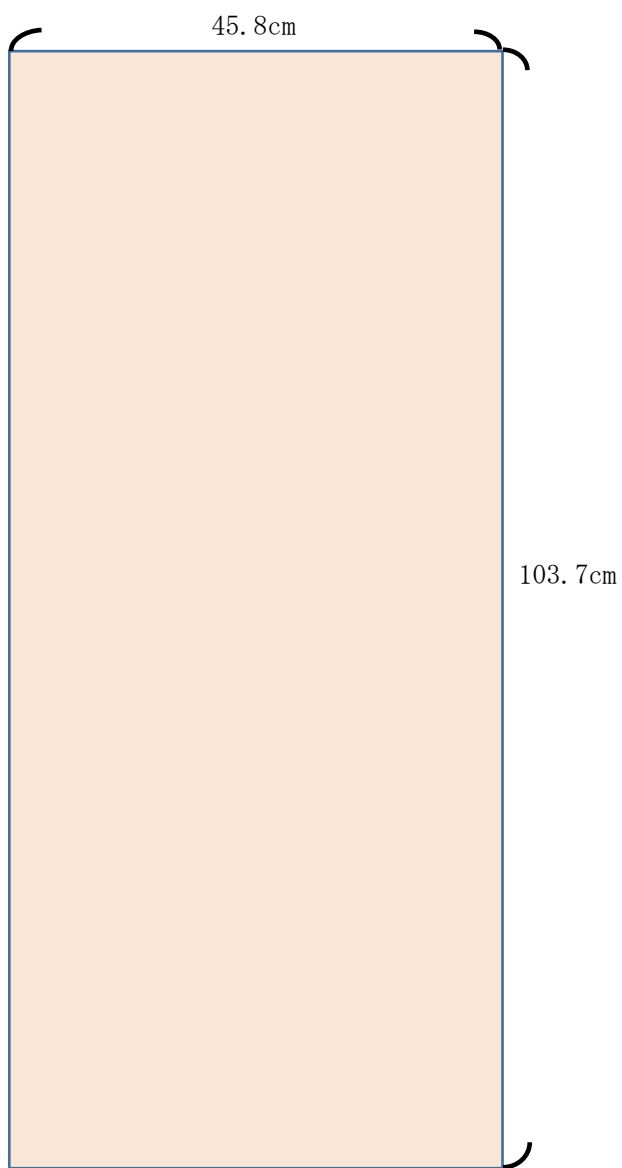
[年度別工程表]	
年度	製作作業内容
2024（令和6）年	①熟覧調査
	②データ分析
	③画材調達
	④画像分析、原寸大出力
	⑤表彩色・裏彩色の検討
2025（令和7）年	①絹の張り込み道具製作
	②表彩色・裏彩色の検討
	③彩色のテスト見本作成
	④ドーサ引き
	⑤上げ写し
	⑥絹上げ
	⑦部分工程見本作成
2026（令和8）年	①彩色の試作
	②裏彩色
	③表彩色
	④表具裂の確保
	⑤部分工程見本作成
2027（令和9）年	①表彩色
	②表具の見本作り
2028（令和10）年	①表装
	②報告書作成
<p>[製作仕様]</p> <p>基底材：琉球の絵画に比較的使用されている絵絹とする。布の密度は監修者、製作者、事務局で相談の上決定すること。</p> <p>図 像：古写真を原寸大に拡大し下図を作ること。</p> <p>色 材：類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定すること。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料、または有毒性のある材料については代替材の使用も検討すること。</p> <p>試 作：彩色のテスト見本を作成すること。監修者または製作者の必要に応じ部分試作も行なうこと。</p> <p>彩 色：彩色のための絹の張り込み道具を作成すること。また、製作にあたってはドーサ引きを行い、必要に応じて裏彩色を行うこと。</p>	

仕立て：掛軸装とするが、表具裂については原資料の情報を参考に監修者、製作者、事務局で協議の上決定する。また、「模造復元 桐牡丹鳳凰図」等の情報を題箋に記して貼り付けること。

納品：本製作及び試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真などを納品すること。本製作については、太巻を付け、保管用の絹布を準備し、保存用の箱を作成すること。必要に応じて紙帙も作成すること。

その他：歴史上の誤謬を避けるため、箱に模造復元の製作年、製作者、事業名を記すこと。また、製作工程がわかるような部分的な製作工程見本も作成し納品すること。工程見本は、図像からモチーフを抜き出し、部分工程見本とする。

【製作図】（本紙のみ）



[調査]

- ・令和6年度熟覧調査及び光学調査を計画

[類例・参考]

※類例

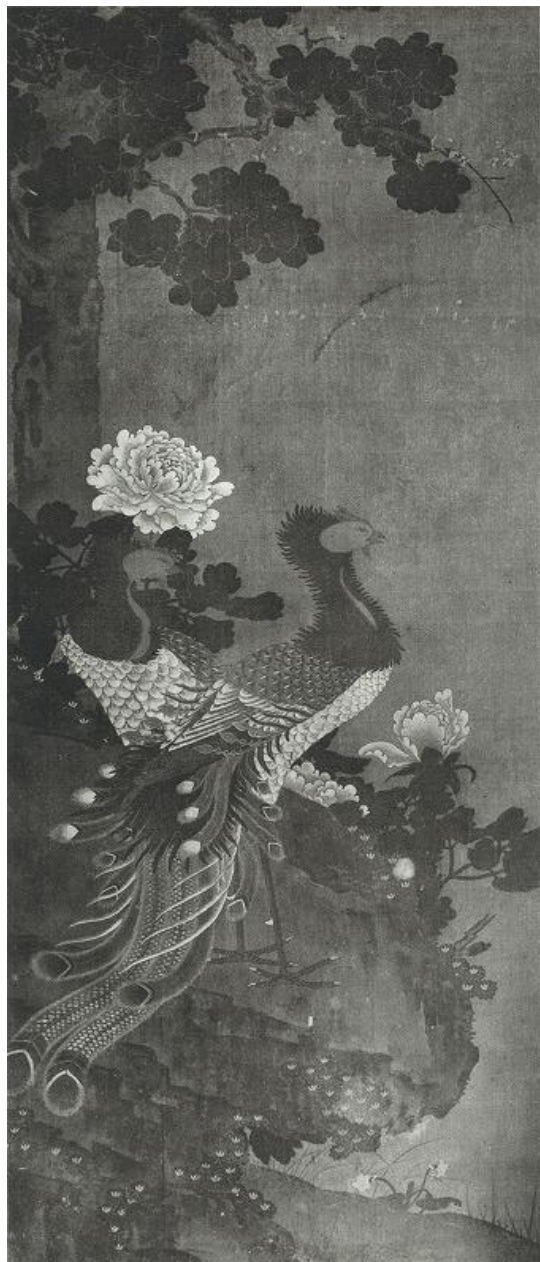
- ・九州国立博物館 孫億筆「鳳凰牡丹図」
- ・福岡市博物館 伝辺文進筆「百鳥図」
- ・三の丸尚蔵館 伝銭選「百鳥図」

[備考]

「本図に見る鳳凰の描写には向元瑚の特色が最もよく出ており、原図は関から舶載の明画と思われ、これを克明に摸写し、細部に亘って手ぬかりなく写してある。そしてまた桐及び岩石の描法には殷元良の筆法が観察され、水墨を基調とした極彩色の花鳥画として、或いは呂紀の風を学んだかとも思われる。すなわち達筆で筆意を見せる明代浙派の画法と勾勒の描線画に彩色を施す黄氏体を雑えたのが呂紀の画風であって、殷元良晩年の花鳥画にもその影響が認められ、これを継承したのが向元瑚のいわゆる唐絵である」

(鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』〈岩波書店、1982年〉 pp.193-194 より引用)

[資料名] 桐牡丹鳳凰図



344、345 向元瑚筆
鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』
(岩波書店、1982年) より

[資料名] 鳳凰牡丹図



孫億筆「鳳凰牡丹図」九州国立博物館所蔵



伝辺文進筆「百鳥図」個人蔵 縦 205.3 横 186.3



伝辺文進筆「百鳥図」福岡市博物館

伝銭選「百鳥図」三の丸尚蔵館

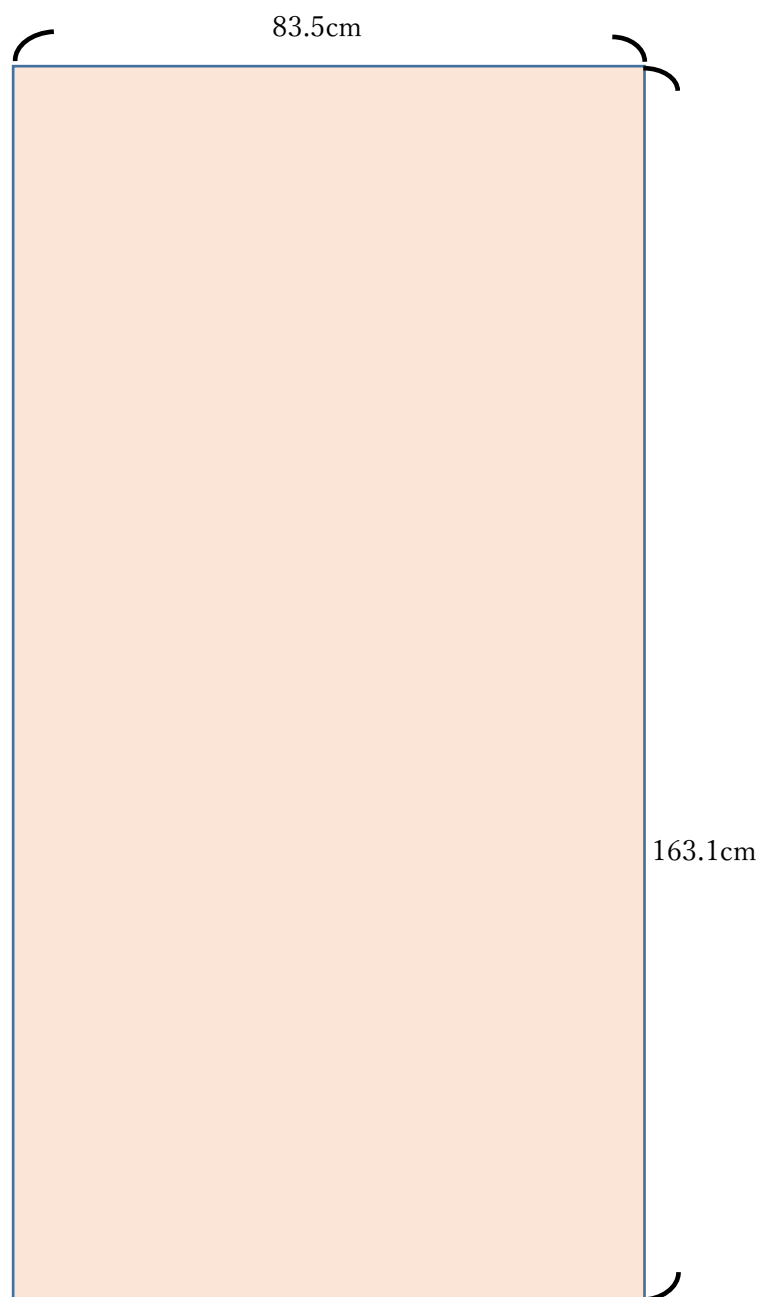


鶉図 殷元良筆 大倉集古館所蔵

[復元資料名] 旧中城御殿板戸絵 騎獅鍾馗図	
[原資料名] 騎獅鍾馗図	[指定] ※原資料写真は重要文化財
[年代] 19世紀	[作者] 李基昌（崎山基俊）一派？
[所蔵] 原資料消失。 原資料写真は沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館が所蔵	[所蔵番号]
[選定理由] 琉球の第一王子・中城王子の邸宅、中城御殿にあった板戸絵である。原資料は沖縄戦で消失したが、大正期に鎌倉芳太郎が撮影した写真が残っている。鎌倉によると、本土の狩野派風の筆致及び彩色技法から、貝摺奉行所絵師の中でも薩摩系の崎山家が描いたと推定されている。現存する類例を分析して復元ことで往時の姿を取り戻すことができ、また、琉球における木材への彩色技法を明らかにすることとともに、日本絵画とのつながりを研究するため復元対象とする。	
[保存状態] 原資料は消失。大正期に鎌倉芳太郎によって撮影された写真がある。近年、高精細で再現像される。	
[法量] 縦 163.1 cm 横 83.5 cm (板戸絵)	
[素材・材質] 基底材：杉板を想定 色材：不明。類例調査を基に決定する。	
[技法] 木板着色	[付属] なし
[想定される科学調査] 蛍光 X 線分析（県内類似事例調査済み） 木材分析（県内類似事例）	
[主たる材料調達先] 板材：入手可能な場合は屋久杉を用いる。入手できない場合は、国産の杉材を使用する。 但し、九州産の杉材を第一候補とする。 色材：国内で入手可能な色材を使用。	

[年度別工程表]	
年度	製作作業内容
2024 (令和 6) 年	①資料調査
	②データ整理
	③材料調達 (木材)
	④画像分析
	⑤板戸加工
2025 (令和 7) 年	①色見本検討製作
	②板材への彩色試作
	③材料調達 (画材)
2026 (令和 8) 年	①部分試作製作
	②墨線書き
	③本製作 (彩色)
2027 (令和 9) 年	①本製作 (彩色)
	②工程見本製作
2028 (令和 10) 年	①展示用板戸枠製作
	②報告書作成
[製作仕様]	
<p>基底材：原資料は屋久杉と紹介されているため、可能であれば屋久杉を入手、不可能な場合は国産杉材とするが、九州産を優先的に使用すること。試作製作、工程見本も含め、板戸材は複数枚用意すること。</p> <p>図 像：古写真を原寸大に拡大し下図を作ること。</p> <p>色 材：類似事例調査を参考に監修者、製作者、事務局で相談の上決定すること。国内で入手可能な材料を想定。現在入手困難な材料、または有毒性のある材料については代替材の使用も検討する。</p> <p>試 作：彩色のテスト見本を作成すること。監修者または製作者の必要に応じ部分試作も行なうこと。</p> <p>仕上げ：原資料写真を参考に板を接いで、滲み留めの処置を行い、彩色を行うこと。</p> <p>納 品：本製作及び試作、余った材料の一部、調査時や製作時の写真などを納品すること。また、保存用の箱及び専用の展示スタンドを作成すること。</p> <p>輸 送：美術品輸送を想定。木の変形を減らすため、急激な温湿度変化が起きないように輸送用の箱を作り、アートソープ等を入れて輸送すること。</p> <p>その他：歴史上の誤謬を避けるため箱に模造復元の製作年、製作者、事業名を記すこと。また、製作工程がわかるような部分的な製作工程見本も作成し納品すること。</p>	

[製作図] (板戸のみ)



[備考]

人物画として本土の狩野風の筆致及び彩色技法から出た琉球画と見られ、貝招奉行所絵師の筆として、薩州伝(内藤等甫)画系の李基昌崎山喜俊一派の作品かとも思われるが定かでない。

鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』(岩波書店、1982年) pp. 193-194 より引用。

[調査]

- ・令和6年度熟覧調査を計画

〈類似事例宮良殿内光学調査結果〉

調査資料「宮良殿内板戸絵 鍾馗図」

- ・白色は2種類存在する。

図像部分（顔、身体、太刀など）からはPbが大きく検出される、Pb系白色顔料が使われている。

67, 68の下地部分および69太刀などからCaが大きく検出され、Ca系白色顔料が存在していると思われる。

Ca系白色顔料は木地に塗られている彩色下地の可能性あり。

- ・緑色部分からCuとAsを検出。Cu-As系緑色顔料と思われる。

As/Cu値はすべて0.4以下。

鷹図よりAs比率が小さい傾向あり。

Pbが同時に検出される箇所はない。

- ・赤色部分から主成分としてHgを検出

いずれの箇所も微量のPbを検出。図像部分にPb系顔料の下塗りがあるのか。

Hg/Pb>3

- ・肉身部（73鼻、83右腕、91左足）からもPbとHgを検出

Hg/Pb=0.3-1.4程度。

- ・70, 73, 81薄白色を呈しているのに微量Hgを検出する。なぜか？

- ・84, 85薄青色顔料が確認できるが、Cuはほとんど検出されない。

Cu系青色顔料ではなく、ウルトラマリンブルーあるいはプルシアンブルーなどの可能性がある。

- ・全分析箇所からK、Ca、Fe、Srを検出

Kは礬砂（カリ明礬）に由来か

Ca検出量は場所によって大きく異なるが下地の白色顔料由来と思われる。

Feは木地に含まれている鉄分に由来していると思われる。

SrはCa系顔料に含まれる不純物と思われる。

- ・黒色部分からは特徴的な元素は検出されない。

墨（主成分はC）が使われていると思われる。

[類例・参考]

- ・旧宮良殿内板戸絵

- ・喜屋武千恵、平良優季

「旧宮良殿内板戸絵の現状と展望」『沖縄県立芸術大学紀要 2020年』

[資料名] 旧中城御殿板戸絵 騎獅鍾馗図



248 騎獅鍾馗図

鎌倉芳太郎 著『沖縄文化の遺宝』（岩波書店、1982年）より